

第1回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇日時 令和3年6月26日(土) 10時~12時
◇場所 奈良県立万葉文化館
◇参加者 村上(平城小)・藏前(真美ヶ丘第一小)・平田(桜井小)
吉岩・川田(学生)
井上・阪口・竹内・辻(万葉文化館)
中澤・米田・大西(奈良教育大) 計12名

◇内容

1. 事業説明、自己紹介

2. 館内展示見学

井上指導研究員、阪口主任研究員の解説をいただきながら、一般展示室を見学

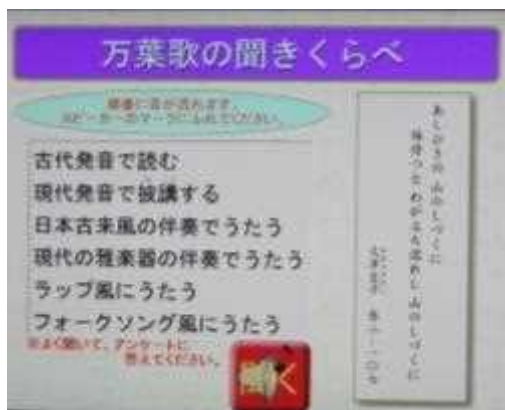


万葉集に登場する歌の分布地図を前に

万葉集に見える地名は約1200。そのうち大和の地名は約300を数え、大和周辺の諸国の地名が約300を超える。これに、石見を中心とした山陰の諸国、太宰府を中心とした九州の諸国、東歌や防人歌で知られる東国諸国、さらに瀬戸内海航路や北陸道、東海道といった往還の途次の地名が見られる。

「歌の広場」

市は多くの人々の集まる場所であり、男女の出会いの場でもあり、歌垣が催された。歌の形式は掛け合いであり、挑むように歌いかけるのに対し、しっぺ返しをするように返歌する形で、機知に富んだ歌が好まれた。名を問うことが求婚を意味した。



「万葉歌の聞きくらべ」

万葉歌は文字として残されているが、実際どのように歌ったのか分かっていない。様々な歌い方によって、現代人が万葉歌にいちばん近いと感じるのはどれか、タッチパネル上でアンケートをとっている。



古代の文房具

筆、墨、硯、水滴の筆記用具のほかに、歌などの文字を記す紙や木簡、小刀などである。紙は貴重で、ほとんどは木簡を使用。

材質や形状から、筆は中国製、硯は朝鮮製と思われる。国内で生産されるようになるのは、奈良時代以降と考えられている。

万葉人の筆跡

万葉の歌人たち（聖武天皇、光明皇后、橘諸兄など）が書いた文字が正倉院古文書などに残っている。筆跡にその人の性格や心理が知られるとすれば、残された歌とともにその人柄を偲ぶこともできる。



その他、万葉劇場では、万葉歌人の歌とともに、人形、映像、特殊照明などを駆使した作品を上映しており、「柿本人麻呂」の回を鑑賞した。

授業化に向けては、現代とのつながりを意識させることで、万葉集を身近に感じ、楽しみながら学んでいく題材が多いと感じることができた。

【参加者の感想（現職教員）】

- ・遠足で何度か来ているが、研究員の方に解説していただくことで、今まで知らなかった視点で館内をめぐることができた。万葉集の音や言葉の響きに注目して、楽しみながら子どもたちが学べるように授業展開できたらと思う。
- ・万葉集ものにこだわるとは、どういうことかの広がりを得た気がする。内容だけでなく、人の思い、言葉、音の出し方など、昔のものではなく、現在までつながってきたものだと感じた。この感じたことをどう教材化するのかという点をこれから考えていきたい。
- ・万葉集から読み取れる当時の人の考え方や生活、風俗などが総合的に分かり、充実した研修だった。勤務校周辺を題材とした万葉集の歌もたくさんあるので、活用した授業ができればと考えているが、なかなかできずにいる。しかし、いろんなことを考えたり、学んだりしながら、いつか独自の教材ができたらと思っている。

※次回予定

7月10日（土）10時～12時

フィールドワーク「飛鳥における埋蔵文化財の調査と保存活用の実例」